ラジオドラマ『鳥人伝説 ～ｑｕｉｅｔ ｓｏｎｇ 静かな叫び～』オーディション台本

① 獣人に殺されたはずのカイト（精霊）とスワン

カイト「スワン」
スワン「カイト！？生きてたのね。私てっきり獣人に殺されたとばかり」
カイト「ごめんよ、スワン。僕はもう魂だけの存在だ」
スワン「そんな…うそよ…だって、ほら…あなたの手、こんなにあったかい…顔だって、胸だって…匂いだって…あなたのままだわ…」
カイト「嬉しいよ。君の記憶は君の愛の証だ。だけどね、スワン、記憶は少しずつ薄れていく。そうすると、少しずつ君には僕が見えなくなるんだ」
スワン「え？…」
カイト「少しずつ忘れて、君は君の新しい旅を始めなきゃいけない」
スワン「新しい旅？…」
カイト「そう。だけどいつか必ずまた会える。その時聞かせて欲しい。君の過ごしてきた旅の話を」
スワン「分かったわ…でも、私はあなたを決して忘れない」

② 西方の獣人（人間）と獣人ウルフ

西方の獣人「我々獣人から逃れるために鳥人の多くが、ケルテの森に逃げ込んでいるようです。それを追う」
ウルフ「しかしあそこは昔から聖域、狩りをすることを禁じられた森です」
西方の獣人「狩りはしない。捕まえるだけでいい。鳥人の中から良質なオスとメスを選び出し、卵を産ませ、飼うのです」
ウルフ「飼う？」
西方の獣人「鳥人を番いで飼い、卵を産ませ孵し、雛を育て頃合いがきたら殺して喰う。どうです？これならば食料が尽きることはないでしょう？」
ウルフ「…ですが、それでは獣人としての掟が…」
西方の獣人「掟？…そんなものには何の価値もありはしない」

③ メス鷲の長老イーグルと群れのリーダーのクロウ

イーグル「やはりここは聖霊の泉なんかじゃないね」
クロウ「チェルネバウルの泉…強大な火を手に入れた人間の獣人は、この場所で神の怒りに触れた…たくさんの命が一瞬にして消え去り、残されたのは汚れた空気と土、そして死の水をたたえたこの泉」
イーグル「だとしたら、早いところここを去らなけりゃならないよ。鳥は穢れに敏感だ。これ以上、この穢れを浴びていたらいつどうなるか…ウッ」
クロウ「イーグル！？どうしたんですか！？」
イーグル「年寄りにはちょいとばかりきつかったようだね…もっと早く気付くべきだった」
クロウ「イーグル、しっかり！」
イーグル「クロウ、よくお聞き。 このままじゃ全員、獣人に殺されてしまう。そうなったらもう取り返しがつかないんだ。スワンと番いになり卵を産め。種を絶やすんじゃない。生きつづけると言っておくれ…クロウ…スワンを頼んだよ…（絶命）」
クロウ「イーグル！…イーグル…」